

4. アマルティア・センの貧困研究—ケイパビリティ概念まで

①センの貧困測度

センの貧困研究は、「相対的貧困が絶対的貧困にとって代わり、もはや相対的貧困の時代が到来した」という言説が興隆する 1970 年代に符合するように進められている。

1970 年代には、センは人々の低所得についての情報を、厚生（人間の満足観）の少なさとして評価してその社会の貧困度を測定する「社会的厚生関数」の検討を進め、この伝統的な手法の中で、それまでの貧困者を均一な集団として扱う測度（貧困率、貧困ギャップ比率）とは一線を画する、貧困者内部の格差を反映する新しい「貧困測度」を開発している。現在多用されている FTG 測度はこの測度を公理分析的に改良した測度である。

この測度こそ 1976 年に公開された論文「貧困：測定への序数的アプローチ」[Sen(1976b)] に於いて発表された、貧困率、貧困ギャップ比率、貧困者のジニ係数を抱える公理分析の手法を用いて開発された新しい測度「セン測度」である。セン測度は「貧困と不平等と言う相互に関連してはいるが異なった二つの関心を統合する最初の試み¹」とされ、相対的貧困（不平等問題）と絶対的貧困の関係を数理的に明らかにしている。

②セン測度の中の不平等問題

この不平等度や貧困度を厚生への不足度から測ろうとする厚生経済学的手法による貧困測度は、人々の所得調査、所得分布の動向から低所得を捉えて、その程度を厚生（財などからえられる満足感）の少なさとして、集計しまとめあげる「社会的厚生関数」である。

その集計において、その測度が貧困と言う状態のうちの何に注目しているのかを、公理として明示し、測度の弾き出す貧困度の傾向を分析する手法が「公理分析」である。ある測度にあてはまる公理群、当てはまらない公理群を分析する事（公理分析）によって、その測度のはじきだす数値が貧困のどんな様相に反応し易いのか、反応しない（捕捉できない）のかなど、測度の傾向性、癖、特徴を客観的に検討する事ができる。

不平等測度では満たすことができない事が多い公理、「強移転性」「サブ・グループの整合性」、「分解可能性」と言う公理については、セン測度でもこれらを満たさないことが知られており、このことはセン測度は、不平等測度と同質性がある事を予測させる。

政策作成過程で便益性は高く重要とされる「サブ・グループの整合性」、「分解可能性」についても、セン測度は満たさないのが特徴である。社会関係上の齟齬、不都合、あるいは

¹ 鈴木興太郎 後藤玲子 『アマルティア・セン—経済学と倫理学』P223 実教出版
2005 年 11 月 25 日

は不平等問題をどの観点でとらえようとするのか、財の配分上の不平等問題の背後にある社会関係の齟齬を、どのレベルで集約できるのかが、貧困測度の特徴であろう。

③ セン測度（センの貧困測度）

セン測度は結局以下の様に纏められる。セン測度は二つの項に分かれていて、そのうちの後項部分にジニ係数が「入れ子」のように抱えられている。

センの貧困測度 : (セン測度のジニ関数の均等分割線は貧困ラインである)

$$P \text{ (貧困の度合い)} = \frac{H(I+(1-I) \times \text{貧困者内部のジニ関数})}{\text{全人口数}}$$

展開すると: $P \text{ (貧困の度合い)} = HI + \frac{H(1-I) \times \text{貧困者内部のジニ関数}}{\text{全人口数}}$

$$H \text{ (貧困率)} : \frac{\text{貧困線以下の人数}}{\text{全人口数}}$$

$$I \text{ (所得ギャップ比率)} : \frac{\text{貧困線} - \text{貧困者所得の平均}}{\text{貧困線}}$$

セン測度の前項部分は個人の所得額に規定される部分であり、社会における低所得問題の広がりや深さ、主に絶対的貧困部分と読むこみ事ができる。しかしこの項は貧困線をどの水準を採るかによっては、変化を免れ得ない数値であり、相対性を完全には払拭できない構造にあると思われる。

一方の後項部分はジニ関数を抱えている事で分かり易く示されているように、他者との比較、自分の所得と平均的所得の双方に規定される部分であって、その本質は格差、不平等問題である。後項部分は、社会の所得分布の変化（貧困者内部のジニ係数、貧困ギャップ比率、貧困率）、その動向によって伸縮する事象であり、大きくは変化しない前項（絶対的貧困）を膨張して覆いつくし、あるいは縮小して露出せしめると考えられる。

後項は豊かな社会（先進国型）では膨張して前項をおおい尽くしており、貧しい社会（発展途上国型）では縮小して、前項を露出させていると考える事ができる。このことから貧困と言う概念は、前項の絶対的貧困と、後項の社会の標準的な生活との格差、不平等問題である相対的貧困という、二つの種類の貧困を併せ持っており、この二つの貧困は社会の所得分布、貧困率、貧困ギャップ比率、ジニ係数の動向、そして貧困線の動向によって、その重なりあいを変化させながら、貧困全体を形造っている事を示しているといえよう。

④ エンタイトルメント・アプローチ（権限アプローチ）

この後、センは所得を媒介として貧困度を測ろうとしても、様々な社会の貧困度を比較できる貧困測度を特定することはできない事をふまえて、飢餓が蔓延する飢饉への分析においては、所得ではなく、食糧を手に入れる諸条件である「エンタイトルメント（権限）」概念による飢饉へのアプローチ（権限アプローチ）を試みている。

1970年代、80年代はエチオピア（1972～73年と1984年から1985年）、サヘル砂漠地

域（1975年旱魃 1985年大旱魃）、バングラデッシュの飢饉（1974年）が相次いでいる。

ここでセンは、飢饉のような状況下では不平等問題としての相対的剥奪（貧困）が絶対的貧困にとって代わる事はできないのであり、「相対的剥奪は絶対的貧困を補完するものである²⁾」として、二つの貧困概念の関係を導いている。

「権限アプローチ」は「実質所得や購買力だけでなく、雇用制度や社会保障、相互扶助のあり方など、より広範な内容を含んだ概念」であり、飢饉の分析、さらには「慢性的貧困や経済開発全般」の分析において、大きく貢献したと指摘されている³⁾。

そして「権限アプローチ」への評価は、その構成から「せつかく能力や資格に注目しているながら、個人の福祉を評価する物差しとしてはあくまで『財・サービス』という伝統的な経済学の物差しにとどまっている⁴⁾」との批判もなされる一方で、「生存維持のために基も基本的な手段となる食糧に対するエンタイトルメント（権限）に焦点を当て、それを『財・サービス』の物差しで評価する事が、十分に根拠あることである⁵⁾」とも指摘されている。

※『自由としての開発』の中で、センは飢饉防止には、飢饉が起こっても死ぬことのない支配者層に、飢饉を防止する政策を打たないならば失脚すると言う飢饉防止への政治的動機を与える事、そして政策に大きな影響を与える自由な報道と民主主義が大切との2点⁶⁾を指摘している。現下日本の報道の偏りは、後に大きな問題を残すのではないだろうか。

そしてセンはこの後、エンタイトルメント（権限）が産みだす「ケイパビリティ（潜在能力）」へと関心を移してゆくわけである。

2 アマルティア・セン 黒崎卓・山崎幸治訳『貧困と飢餓』P289 岩波書店 2004年5月

3 アマルティア・セン 黒崎卓・山崎幸治訳『貧困と飢餓』P284 岩波書店 2004年5月

4 絵所秀紀 山崎幸治編著 『アマルティア・センの世界—経済学と開発研究の架橋—』
P90 晃洋書房 2005年2月25日

5 同上

6 絵所秀紀 山崎幸治編著 『アマルティア・センの世界—経済学と開発研究の架橋—』
P125 晃洋書房 2005年2月25日